

保育者養成課程在籍学生を対象にした 「キッズ・プログラム」への認識調査

—表現の指導力はどうのように身に付けていくのか—

三輪 亜希子

Study of the Awareness of "Kids Program" in the Students of Nursery Teachers Training — How to Acquire Leadership of Expression —

Akiko MIWA

1. 研究の前提

「キッズ・プログラム」とは、次代を担う子どもたちがアートとの出会いを通じて多様な価値観や創造力を身につける機会を提供するために導入されたものである。

平成23年度から行った2年間の実態調査では、研究者自身の経験と交流力を活かした内情調査が可能となる「ダンス」の実施プログラムを対象に行った。

主に1年目は各地域で導入されている「キッズ・プログラム」を実際に見学及び体験しながら実態調査を行った。ワークショップの実施事例として、「キッズ・ワークショップ軽井沢2012」、「キッズアートキャンプ山形」、山田うん主催の茅ヶ崎市民とのダンスワークショップの3事例、また、子供向けの舞台鑑賞の実施事例として、彩の国さいたま芸術劇場主催「日本昔ばなしのダンス (ももたろう)」、「チックとタックの不思議な扉」、「幼児・児童のための演劇祭2012in大阪」の3事例、合計6事例を対象とした。

「キッズ・ワークショップ軽井沢2012」では、主催側が変装をして派手なコスチュームに身を包み非現実的な空間を演出していたことが特徴的であった。子供たちも先生ではなく、「なおやマン」と呼び、ともに遊びながら実施を進行する様子が伺えた。主な内容は、小道具を多用に用いた演劇とiPadのアプリを利用した絵本製作であった。演劇では、単に上演するのみでなく、戦いの場面で観客の中から子どもを選び主役を任命していた。

「キッズアートキャンプ山形」は、東北復興支援機構TRSO (以下TRSO) という主催団体が東北芸術工科大学と連携して行ったミュージカル製作である。TRSOは、東日本大震災後の新しい東北を創造するプロジェクトとして、芸術家やデザイナー主体によるアクションを支援・推進し、学生や市民対象のレクチャーやワークショップ等の活動をコーディネートしている。TRSOの一環である「キッズアートキャンプ山形」の2012年夏のテーマとして『新訳“てぶくろ”』が上演題材として扱われた。東日本大震災で被災した南相馬市の子どもたちとその家族を、東北芸術工科大学に招待し、ウクライナの民話『新訳“てぶくろ”』を題材に、ダンス、ファッション、音楽、美術のワークショップを集中的に開催して上演までまとめられた。上演作品及びワークショップの報告展では、ダンス、ファッション、音楽、美術のそれぞれのジャンルがどのような教育指導を行ったのかをワークショップのメイキング映像を用いて放送されていた。特に、ダンスのワークショップでは、振付担当者1名と京都造形大学のダンスコースの学生6名がス

スタッフとして関わり、円形のコミュニケーション運動を用いた体ほぐしの導入や実際に民話に登場する動物たちの動きを発掘するためのリレーダンス等を主体に子どもから大人までを取りこんだ活動が行われていた。衣装や装置も全てそれぞれのスタッフが起用され、すべて参加者の手作りであった。参加者は、2週間という短期集中型のワークショップに参加し、約30名前後の市民が特別な時間を共に過ごす。お話しを題材にすることで目的が明確化し、ダンスと美術、セリフを取り交ぜるといった規模の大きな総合芸術が実現されていた。

山田うん主催の茅ヶ崎市民とのダンスワークショップは、アーティスト山田うん自身が茅ヶ崎出身であることが大きい。「キッズ・プログラム」は外部講師を呼ぶ機会も多いが、地域の繋がりを高める目的から出身者が主催側に入るケースもみられる。当企画は、財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団の文化事業の一環であり、専門家を講師に迎えたワークショップとして実施された。題材は「浜辺の歌」、かもめの動きを真似る・風になびく心地よさを全身で表現するといったダンスのワークショップと集大成としての発表会が行われた。照明や音響、舞台監督はプロが担い、舞台の上立って自らの身体を見せるという、本物の体験が出来る企画であった。

「日本昔ばなしのダンス (ももたろう)」は、公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団が、平成18年度から普及教育事業の一環として取り組んでいる企画である。子どもと大人がともにダンスの楽しさに触れる鑑賞公演として位置づけられ、コンテンポラリー・ダンス界でも注目の振付家に新作を委嘱し、日本の昔ばなしをダンス作品として舞台化している。日本の昔ばなしという身近な素材を入口に、身体の動きで表現することの楽しさや多様性を体感することや、その体験を親子のコミュニケーションの機会として鑑賞する機会を提供している。

こうして、各事業団が各々の施設における特徴を打ち出しながらアート体験を通して子どもの感性や創造力育成を担っているのが「キッズ・プログラム」である。主催場所の劇場や美術館には、アーティストが作品制作をする生の現場が広がり、本物の絵画が展示されている。愛知県芸術劇場の「キッズ・プログラム」では、鑑賞と合わせて劇場内ツアーやダンスワークショップを実施するなど、観る・体験する・本物に出会うが組み合わせられた企画が用意され、芸術の裏側の仕事までもこどもの目線で見ることが出来る。

国際児童青少年芸術フェスティバル大阪実行委員会主催の「夏休みに体感する一流のパフォーミング・アーツ 国際児童青少年フェスティバル」では、1週間に渡り演劇とダンス、絵本といったパフォーミング・アーツの様々な分野によるワークショップと上演が行われた。例えばカナダのパフォーマンスグループ「コープス」は、ひつじの生態をライブパフォーマンスとして実演した。「国際児童青少年芸術フェスティバル」では、こうした上演に合わせて親子対象にワークショップが実施された。内容は、ひつじの歩き方と見方、食べ方、立ち上がり方を練習するワークショップで、主催者は実際にひつじの生態を説明しながら状況設定をし、参加者の動きがより本物に近づくための助言を行いながら練習と工夫の時間を設けて進行していた。上演作品を見て楽しむだけでなく、実際に自分の身体で挑戦する時間を設定することで身体への気づきを広げることが可能になるのではないかと感じられる企画内容であった。

また、「ダンス教育ラボ」という横浜市のNPOの事例とし、アーティストが学校へ派遣する「スクール・オブ・ダンス」が理想モデルとして最前線で実施されていることも2年目の研究内容として情報収集することが出来た。「スクール・オブ・ダンス」における2012年の年間活動報告をスライドと映像資料を基にした解説では、横浜市の小学校へアーティスト6名が派遣され、ダンスワークショップと学芸会の創作指導を行った様子であった。2012年度の活動記録を踏ま

え、2013年の活動計画及び報告書の作成、今回のゲストアーティスト2名を交えた実際の現場に関する調査報告が質疑応答を踏まえた形で行われた。教育の分野に学外講師としてアーティストが介入することが、子どもたちの教養育成にどう影響するのか、ダンスも音楽や絵画同様、芸術的感性を磨くための鑑賞体験としての重要な役割を果たせる可能性をもつことなどが、討論の結果から導き出された。

2. 研究目的

研究の前提として行った実態調査から、「キッズ・プログラム」は、各地域の特色を生かした多様な取り組みがなされていることが分かった。しかしながら、参加者数が限られる点が目立った。特に劇場や文化事業に精通している市民に限定され、例えば、保育関係者は「キッズ・プログラム」という名前を聞いたことが無いという現状であった。

そこで本研究では、この普及という点に関する調査を進めたいと考えている。

「キッズ・プログラム」は体験を通しての感性や創造力の育成を目指しているが、島¹⁰⁾によると、日本国内の教育現場で感性の育成を担うことに限界がある要因の一つは音楽や体育の教科内で西洋文化や古典を賛美し、また健康体を育成するために運動があるといった「情操教育」の立場が取られているからである。島は、自ら学び、物事の感じ方に決まりがないことを知る段階の手前で偏った情操教育を体験することが、成人してもクラシック音楽は苦手であるとか、限られた人口が楽しむ場が劇場であるという認識の芽生えに繋がると指摘する。確かに文化施設が発信している「キッズ・プログラム」は、ある程度の文化・芸術に対する趣味趣向が出来上がった大人の視点でみると、この体験がどのように感性の育成に繋がるのかという点を明確に受け取ることは難しいであろう。なぜなら、日常動作と身体表現の線引きは難しく、ワークショップを通して何を体感したかを指し示すような言葉での表現が伴いにくいのは事実である。そのため、参加者の層が元々未知の体験に興味の深い親の働きかけや元々ダンスや演劇の素養がある子どもといった少数派の実態に留まってしまう傾向にある。実態調査を行った地域でも、場所によって参加者数に大きな差があった。この点をどう打開していくのが本研究の課題点であり、「キッズ・プログラム」の普及・広報活動の方向性を継続的な調査を通して見つけていきたい。

実態調査の2年目は主にプログラムを開催するしくみと体制に関する情報収集を行い、今後「キッズ・プログラム」普及の糸口を探った。広く一般に認識され、選択の幅が多様になることを理想に掲げた調査を行った。

「キッズ・プログラム」の開催目的として浮き彫りになったことは、ダンス学習の中に遊びを取り入れるなどの指導を工夫しながら子どもの体験学習を通した人間形成に重点を置くこと、遊びの中で創意工夫する能力を育むこと、異年齢間の触れ合いを大切にしていること、学校教育でも子どもの個性や多様な表現が尊重される時代であることを踏まえ、地域活動の中でも総合的な発想力や創造力を養うための環境整備に重点が置かれていることである。そして、開催体制を整えるために重要視されることがネットワーク・人材育成・実施アーティストの指導・歴史的問題への課題解決であるとされた。具体的に劇場がダンス学習の場を派遣、提供している活動の一つに「アウトリーチ」があり、劇場から遠く離れたところへも文化・芸術を届けていくための普及活動として注目されている。次代を担う子どもたちが芸術をいつでも身近

に感じ、生活の中での芸術の地位を確立していくことが「アウトリーチ」を通じた芸術普及活動の出発点である。ダンスが様々な意味で地域社会に貢献できる手段であることを認識しながら、劇場が教育機関と市民の間に入り込んでいくが体制作りには欠かせないという点も研究を通して分かった。

また、「キッズ・プログラム」や「アウトリーチ」を実践していく立場のアーティストの社会性を身に付ける研修制度も重要であり、教育機関に誤解を生まないためにもいきなり現場へアーティストをぼんと送り込むようなことが無いよう事前のミーティングと派遣トレーニングの充実化も必要課題であるとされた。更に、こうした企画を支えるコーディネーター不足が日本の文化発展が遅れている理由の一つであると分かった。文化事業の展開に対するサポート体制が希薄な日本の歴史的な条件が伴うため、まずは市町村レベルでサポート体制を整え、その後県立の劇場の整備が整って、やっとアーティストの働く場所のセッティングへと繋がると考えられる。それらを支えるダンスプロデューサーの横のつながりの強化とともに組織的に現場を豊かにしていくことが長期の課題として浮き彫りとなった。

こうした「キッズ・プログラム」を取り巻く現状調査を踏まえ、実際にこの分野が普及する上で重要な点は、知っている人だけの特別な文化という印象をなくし、広く一般に情報が伝わることではないかと捉える。舞台芸術が子ども達の心の豊かさの育成にとって重要な糧になることを念頭に、それが限られた市民だけの特別なものという印象をなくすことは大前提である。

また、劇場や文化施設に習慣的に足を運ぶ層だけでなく、保育現場で働く（働くであろう）層にとって、自らが子供時代に体験した舞台鑑賞が今後の指導に役立つものだという点へ気づける機会を提供することが普及につながる第一歩ではないだろうかと思えている。

研究者が保育養成の学校で指導をする中で、こどもの感性の育成に携わる学生が興味を持っているが芸術・文化に対する知識が薄いという点を感じていた。つまり、子どもに沢山の芸術的「遊び」を導入できる立場に立つ保育者が、「キッズ・プログラム」の存在を知ることは、プログラム参加者層の増加と保育力の向上の双方に利点があると捉えている。

よって本研究では、「キッズ・プログラム」普及を念頭に、保育養成過程に所属する学生を対象とした認識調査を行うこととする。彼らが舞台表現芸術に関心を持っているのかどうか、子供の感性の豊かさ育成を視野に入れた「キッズ・プログラム」の実態について認識があるかどうか、そして学生に情報提供をするならば、どういった形で行うのが良いかという点についてアンケートの回答を分析し、結果を踏まえた今後の指導方法の検討及び普及のための糸口を探ることを目的とする。

3. 研究方法

保育者養成課程に在籍する学生たちの「キッズ・プログラム」に対する認識を明らかにするため、以下の方法をとった。アンケート実施の前提として、学生へ「キッズ・プログラム」の視覚資料を見せて内容の説明や開催目的の説明を行った上で、保育者の立場からの回答を聞いた。

〈調査概要〉

調査対象：平成26年度名古屋女子大学短期大学部保育学科1年生（計151人）を対象とした。

調査時期：2014年7月

調査方法：研究者がこれまでに行った「キッズ・プログラム」の実態調査から、内容の趣旨及び参加者の反応を事前に説明した上で、アンケートを実施した。

調査内容：アンケートは、過去の舞台鑑賞の経験に関する質問、「キッズ・プログラム」への興味・関心に関する質問、調査対象者自身が提案する「キッズ・プログラム」に関する質問を計7項目設定した。

分析方法：計7項目の質問を、それぞれ設問1～7と回答の表1～7と表記し、表を提示する。表を基に、回答の共通項や個々の視点に着眼しながら考察を行うこととする。

4. 結果と考察

設問1において、「キッズ・プログラム」を知っているかを聞いたところ、「はい」と答えた学生数が0名、「いいえ」と答えた学生数が151名であった。

次に、設問2では、「キッズ・プログラム」の情報が入れば、参加してみたいと思いますか。」という問いかけを行い、こちらもまずは「はい」、「いいえ」で返答した上で、その答えに関する意見を記入するよう促した。「はい」と答えた学生数は136名、「いいえ」と答えた学生数は15名であった。

設問2に対して、「はい」と答えた回答群の理由を以下に記す。

自ら興味を持ち、過去の経験からさらに新しい表現を発掘したいという意欲から「はい」と答える回答群が多く上がった。さらには、自分自身の体験として捉えるのみでなく、子どもにとって様々な芸術に触れる機会が貴重であるという保育者としての立場からの答えも多く上がった。

体験に興味を示す回答群

・体験したいから。
・実際に、裏ではどんな稽古をされているのか、リハはどんな感じなのか気になる。
・練習風景の見学や稽古の体験など、そのような貴重な経験ができることを初めて知りました。
・役者さんがどのようにして作品を作り上げているかに興味があるから。
・自分が経験したことがないことができるから。普段できないことができることは興味がある。
・得るものがあると思うから。
・芸術だと日本に留まらず、異国のものにも触れられるから。
・本物の体験をしたら、今までになかった発見ができると思ったから。
・なりきりとか楽しそうだから。
・たくさんの人と関わることができるし、体を動かせたりできるので楽しそう。
・演技をして自分の個性を表したい。
・俳優さんたちと一緒に参加できるのはとてもたのしそう。
・新しく刺激を受けられるから。

過去に舞台芸術に触れた経験のある回答群

・日頃から体を動かしていて、やってみたいと思った。
・音楽やダンスが好きだから。
・舞台芸術に少し興味があるから。
・バレエをやっているので芸術にとっても関心があるから。
・踊ったり、歌うことが大好きなので、参加して様々な芸術に関わっている人とお会いしたいです。

保育者としての立場からの回答群

・子どもたちと遊ぶときにどんなことがたのしいか勉強になりそうだから。
・子どもに良い影響が与えられるから。
・保育士として勉強になりそう、役に立ちそう。
・子どもと触れ合うことができ、楽しそうだから。
・子どもと交流できるし、どのようなものが子どもの興味を引き付けるのか学べそうだから。
・子どもたちと遊んだりするときに参考にしたい。
・園での保育内容に活かそう。
・子どもと日常では体験できないような体験をさせてあげたい。
・私自身興味があり、子どもたちにも色々な体験をさせてあげたいから。
・子どもたちに色々な価値観を身に付けさせるのは、大切なことだと思ったから。
・子どもに少しでも芸術に触れてほしい。
・子どもの感性が豊かにあると思ったから。
・子どもにリズム感覚を養ってほしいと思うから。

「いいえ」と答えた回答群の理由を以下に記す。

自分自身がダンスをすることや演じることにに対して苦手意識を持ち、価値観を理解できないという判断から「いいえ」と答える回答があがった。しかし、子どもたちの体験には賛同するという意見を続ける回答もあった。

舞台芸術に苦手意識を持つ回答群

・ダンスも演劇もできないから。だが、子どもが生まれた場合は、子どもに参加させてあげてみたいと思った。
・自分とは別の世界だと思う。
・世界観が違う気がするから。
・近所であればみてみたいが、遠くに行ってもまでは、と思う。
・興味がないから。
・ダンスをすることが苦手だから。でも子どもがやりたいと言ったらやろうと思います。
・ダンスは苦手です。オペラはよくわかりません。
・舞台などにあまり興味がないです。
・演じることや声をだすのがあまり勇気がないから。

設問3では、これまでの体験として、舞台芸術に触れた経験があるのかどうかを調査する質問を提示した。「はい」と答えた学生数は97名、「いいえ」と答えた学生数は54名であった。「はい」と答えた回答群に対して、具体的にどのような開催内容であったかを質問したところ、いずれも学校での芸術鑑賞会での劇団四季やその他のミュージカル、歌舞伎の鑑賞、小学校への巡回型演劇が多数を占めた。また、海外旅行先で、スペインのフラメンコやイタリアのレストラ内オペラを鑑賞したという回答もあった。「ヘレンケラー」を鑑賞したと回答した学生は、作品の展開と登場人物の心理を詳細に記憶しており、その時観た感想も記していた。

設問4では、設問3で答えた舞台鑑賞の経験に対して、現在覚えている感想を訪ねる質問を提示した。回答の中で、圧倒的に多かったものは、生で観た舞台のスケールの大きさと演技者の表現力に対する「迫力があつた」「感動した」「驚いた」「鳥肌がたつた」という回答であった。

舞台芸術の表現に対する回答群

・次々に変わるパフォーマンスとときどきあるボケが楽しかった。
・一つ一つの表現の仕方が面白かった。
・音響や舞台装置などの細かい部分が、とてもこっていて、いろんな舞台をこれから観たいと思った。
・お客さんが手拍子などで参加できる演目があり楽しめた。
・演劇のすごさに感動し、こういったものに感動できる年齢になったと実感した。
・歌・ダンス・装置・衣装全てに圧倒され感動しました。ダンス公演では、5歳から50代過ぎまでの方々のダンス、選抜者の公演を見て1曲ごとに色が違うダンスに刺激を受けました。
・その世界に引き込まれて、とてもほっこりした。

役者の表現力に対する回答群

・女優さんの声の響きに感動した。
・声が大きくて迫力があつた。
・演技をしている人の表現や表情がすごかった。
・いろんな種類の人間がでてきた、人の醜い部分も沢山見えた。太宰治を題材にしていたから難しいと思ったけれど、すごい面白かった。
・全員の息があっていた。
・バレエは台詞なしでも踊りで表現できるところがすごいと思った。
・人間ができることを超えていると思うくらいに技があり、すごかった。

舞台鑑賞の体験に対する回答群

・4時間がとても長かった。しかし4時間も集中する機会は初めてだった。
・舞台を観るときのマナーが身に付いた。
・(学校単位で行う芸術鑑賞会という機会について)自分から観に行く機会もないので、とてもよいものだった。

舞台鑑賞に否定的な回答群

・つまらなかった。寝ている人が沢山いた。
・能は眠くなりました。
・中学生のときに観たので内容が難しかった。

設問5は、こうした過去の舞台鑑賞体験をより自分の身近なものに感じることが出来るような「キッズ・プログラム」に参加することで自らの実践力をつけたいと感じたのか、あるいは劇場単位で開催されるものが多く普及するならば専門家に任せたいと思うのかという質問を提示した。回答を集約し考察したものが以下である。

実践力をつけ、子どもがどういった内容に引き込まれるのかを自ら探求したいという回答が多く上がった。具体的に「役になりきること」の表現力をつけたいという意見や、「舞台や芸術から学ぶことや保育につながることは多いと思います。何か舞台を観に行くなど多くの経験をしたいと思いました。」、「教え方がうまくなると思う」といった保育力向上を見越した意見が目立った。

しかし、劇場や美術館といった文化施設という特別な環境が子どもの感性に刺激を与える重要な要素と捉え、専門家に任せたいという意見も上がった。自ら実践力は身につけたいが、「本物でしか体験できない迫力があるので両方を取り入れたい」といった回答も上がった。

最後に設問6、設問7では、アンケート対象者の企画力を問う内容を提示した。設問6では、文化施設を利用した「キッズ・プログラム」の内容の企画依頼を受けた際にどのようなことを実践してみたいかという質問を提示した。設問7では、実際に保育者として働き始めた際に、指導内容として取り入れてみたいと感じた内容がアンケート実施者の紹介の中で見つかったらそれを記入するよう促した。それぞれの回答を集約したものが以下の回答群である。

アンケート対象者による「キッズ・プログラム」の企画案

・劇場を使って、歌、劇、ダンスをしてみたい。踊りながら歌いたい。音楽とダンスを合わせたようなもの
・演劇をして楽しみたい。
・からだでリズムを叩けるような運動
・音楽を聞いてイメージしたものを絵で表現する。
・オペラの練習の見学
・お話の作成
・絵を使ったダンス
・みんなで水を表現してみよう。色んな虫や動物、季節や植物になりきり
・みんなで一つのものを作ってみたい。
・劇場で演じてみたい。
・エコ制作（新聞紙やペットボトル、牛乳パックなどいらなくなったモノを使って、一つの作品を作り上げる活動）
・自分たちで台本を作り劇場で発表したい。
・昔の話などを劇とかで子どもに伝えたい。
・劇団の人を呼ぶ。

・美術館で一つのテーマを決めそれに沿った絵画を展示、その絵画に込められた意味を考えいろいろな人と意見交換したい。
・色んな国の民族ダンスの体験
・世界の海外展覧会、実際に子ども達にも描いてもらう。
・みんなが知っている童話（シンデレラ、白雪姫、大きなカブ等）を劇にする。
・華やかな表舞台だけでなく裏方の世界も見てほしいので、道具作りや照明等をつかう体験のできるもの。
・観客も一緒に体験できるもの
・大きな声を出して大きな動作をとるという企画をつくってみたい。
・オペラハウスや世界の有名な美術館の裏側を子ども達に体験できるプログラム
・みんなで協力して作るアート、トリックアートの体験をしたい。
・美術館などで、自分自身がアートになるという感じの企画
・ミュージック空手を活かしたもの
・映画館の構造を知る。
・劇団の稽古見学から、搬入搬出の流れ、仕込み、リハーサルなど劇がつくられる工程を一通り見学し、子どもが舞台に興味を持てるようなことをしてみたい。
・合唱や絵の制作など、子どもだけでなく子どもも保護者も体験できるものが良いかなと思いました。
・いろいろなリズムを取り入れたダンス

5. まとめ及び今後の課題

アンケートの回答結果より、「キッズ・プログラム」に対して興味を抱き参加意欲が増したと受け取れる学生の反応を多くみることができた。特に自らが楽しむためという姿勢のみでなく、保育者としての立場から子どもにとって様々な体験を増やしたいという視点や保育力を高めたいという発想からの意見が多くあがった。

「キッズ・プログラム」に対して参加意欲を問う設問2への回答では、「自分が経験したことがないことができるから。普段できないことができることは興味がある。」といった未知の体験や新しい扉を開くことへの興味を示すものが多く、対象者がこれまで抱いていた、舞台芸術は知らない世界である、というハードルが低くなり情報が入るのであれば様々なことに参加してみたいという意欲を示していた。

設問4の回答の中で圧倒的に多かったものは、生で観た舞台のスケールの大きさと演技者の表現力に対する「迫力があった」「感動した」「驚いた」「鳥肌がたった」という回答であった。また、学校単位で行う芸術鑑賞会という機会について、「自分から観に行く機会もないので、とてもよいものだった。」という回答が上がった。

設問5では、実践力をつけ、子どもがどういった内容に引き込まれるのかを自ら探求したいという回答が多く上がった。しかし、劇場や美術館といった文化施設という特別な環境が子どもの感性に刺激を与える重要な要素と捉え、専門家に任せたいという意見も上がった。自ら実践力は身につけたいが、「本物でしか体験できない迫力があるので両方を取り入れたい」といった回答も上がった。

設問6への回答で企画案として多く上がったものは、ダンスや演劇、歌を単体で扱うものではなく複合的に混合した創作をしたいという回答であった。また美術的要素のあるものや「声を出す」こと、「大きな動作」をすることなど、心と体の解放に向かう企画、プロの役者などの指導を体験し子どもがどのような反応を示すのかを知りたいという企画が上がった。

対象者は其々未知体験への興味はあるが、どこへ出向くと情報を入手できるのかという方法を知らないという状況であることが本研究において明らかにできた。保育士養成課程在籍の学生が、自身がこれまでに経験した舞台鑑賞や舞台表現の活動を、どのように保育現場で生かすことができるのか、その発想が持てるような援助と指導の必要性を感じた。「キッズ・プログラム」に対して敷居の高く縁遠いものではないという認識を促すことも方法論の一つであろう。今後は指導場面において時期や設定内容に合わせた「キッズ・プログラム」の企画を提示することや、学校教育と文化施設が連動しながらそれらを支える運営を整えることが必要ではないかと捉えている。この点を研究の継続的な課題としたい。また、表現系の授業実施者としての立場を活かし、学生への情報提供を積極的に行っていく姿勢である。具体的な学生への情報提供として、「キッズ・プログラム」で行われた実施内容を「総合表現演習」や「保育表現技術(体育)」といった実技授業内で実践することや、芸術鑑賞の機会を組み入れることを検討していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 白旗和也：子どもが楽しく意欲的に取り組む体育の授業づくりのポイント，学習指導要領の趣旨の実現 初等教育資料，58-59，文部科学省教育課程課/幼児教育課（2012）
- 2) 島崎直也：遊びと学びのワークショップフォーラム2013，<http://everevo.com/event/6096>，〈2013〉
- 3) 秋元雄史：子どもとともに成長する美術館を目指して—金沢21世紀美術館の教育普及プログラム—，学習指導要領の趣旨の実現 初等教育資料，豊かな教育の広がり，116，文部科学省教育課程課/幼児教育課（2012）
- 4) 小池博史：からだのこえをきく，株式会社新潮社（2013）
- 5) 片岡康子：学校におけるダンス教育の現状とあらたな場を拓く文化施設への期待，芸術情報アートエクスプレス，vol.29，15-18（2009）
- 6) 松本大輔：「ワークショップ形式」を導入した「多様な動きをつくる運動遊び」の授業づくり，女子体育 体育授業研究，1月号，32-37，社団法人 日本女子体育連盟編集（2011）
- 7) 鈴木和弘：親子でからだを動かして遊ぶことの意味，子どもと発育発達，日本発達学会編Vol.9，No.4，258-260，株式会社杏林書院（2012）
- 8) 近藤良平：からだと心の対話術，株式会社河出書房新社（2011）
- 9) 仙道弘生：パフォーミングアーツにみる日本人の文化力，独立行政法人国際交流基金，株式会社水曜社（2007）
- 10) 島静一：「子どもたちと芸術との出会い体験事業」について，Arts Policy&Management，No.15，UFJ総合研究所 芸術・文化政策室（2002）
- 11) 唐津絵理：劇場におけるアウトリーチ～ダンス・プログラムの可能性～，舞踊学，第36号，128，舞踊学会（2013）